



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

終わらない「いのち」

暑い夏とともに今年もお盆が巡ってきました。お盆でまず思うのは亡くなった人のことでしょう。一般的で優しい表現をすれば、お盆や法事などの仏事は、亡くなった人（死んでしまった人）とのお付き合いのときと言っていいかもしれません。

* * *

皆さんは、亡くなってしまった人とどのように付き合っていますか？死んでしまったらもうこの世にはいないのだから付き合いなど出来ない、そう思っている人もいらっしゃるでしょう。しかし、死者に対する思い出のない方はいないはず。いい思い出、悪い思い出、忌まわしい思い出もあれば、忘れてしまいたい思い出、美しい思い出、大切にしたい思い出もあるでしょう。その思い出の処理の仕方も死者との付き合いといえるのではないのでしょうか。

死にはいろいろなケースがあります。小さい我が子の突然の交通事故死、一家を支えていた夫、妻の死、痴呆症の姑の死。果てしない看病に疲れた家族が「早く死んでくれればいいのに…」と思ったことがあったとしても、誰も責めることはできません。そして、生きているときには、「ありがとう」「すまなかった」そんな簡単な言

葉が口にできなかったことを、口には出さずともそれぞれがそれぞれの立場で思うでしょう。

でも安心してください。私たちは亡くなった人たちにまた会うことができます。それが阿弥陀如来のほとけの国、お浄土です。亡き人はすでにお浄土に往かれています。私もいずれお浄土に往きます。そして、そのお浄土で再び会うのです。

お浄土はほとけの国です。みんなほとけとなっておられます。私が「すみませんでした」と言えば、「いいえ私こそ」と平等に心と心が通じ、赦し合える、それがお浄土なのです。

この世においては、なかなか思うように心が通じ合いません。たとえお互い善意であっても対立することもあります。ましてや、嫌味や嫉妬、妬みをもって発した言葉は、相手だけでなく自分自身をも傷つけ、胸の中にいつまでも鉛の重しのように残ります。それがこの世の宿命（思う通りにならない苦）です。

* * *

私たちはややもすると、死んだら終わりという考えを持っています。しかし、それで大切な我が子の死を乗り越えることができますか。目の前の死を自覚している人に心の平穏を感じさせることができますか。何よりいずれ迎える自分が心おきなく

死んで逝けるでしょうか。

仏教が提示したのは、この世の寿命には限りがあるが、同時に死んだあとにも終わらない「いのち」があるということです。人は死んだら終わりだと言いつつ、死んでも終わらない「いのち」をどこかで願っています。その在り方が仏教にはお浄土としてきちんとあるのです。

作家の伊集院静氏のエッセイの中に『世の中の僧と名のつく者に好きな者はいないが、故郷の菩提寺の住職だけは好きだった。弟を水難事故で亡くした縁で話をするようになり、「神はほんとにいるのか」という自分の拙い質問に対し、優しく『わしも見たことはないが、居た方が楽しかる』と言われた言葉が素直にストンと胸に収まった』という文章がありました。お浄土は、いつか私も、大切な人も、必ず往って生まれる（往生）楽しみな倶会一処の世界です。

**なごりおしくおもへども、
娑婆の縁つきて、ちからなく
しておはるときに、かの土へ
まひるべきなり。**

娑婆での縁が尽きたとき、阿弥陀仏が必ず私たちをお浄土へ召喚して下さる。それを「信じて」待っていればよい。親鸞聖人はそうおっしゃっています。

合掌

奏庵法座 盆会（ぼんえ）

日時
7月26日（日）
午前11時より

「真宗宗歌」
阿弥陀経
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

亡き人をご縁とする仏事に「阿弥陀経」をお勤めするのは、「亡くなった人に私たちは何もする必要はありません。阿弥陀さまが必ず仏にして下さっているからです。たとえ忘れていたとしても、必ず再び会えるお浄土が用意されていて、そこに往けばみんな同じ仏弟子です。ですから、互いに赦し合うことができるのです」という、仏教が教える永遠の繋がり（俱会一処）の世界が説かれているからです。お盆の集いです。

どうぞお参り下さい。



浄土真宗のお盆

「お盆には何をを用意したらいいのですか」というお尋ねがあります。スーパーにお盆の飾りやお供えが並ぶのを見れば、何か特別の飾りをしなければならぬと思われるでしょう。宗教習慣は地方によって、教えに則ってというより風習となって色々なものがあり、それが都会に集まって一般化されてきています。そこにこうでなければならないという宗教的根拠はなく、お盆の花やお供えは、この時季の旬のものが定着したものです。

浄土真宗には、亡き人の霊にお盆の二、三日だけお墓から家庭のお仏壇に帰っていただき、また戻っていただくというような教えはありません。亡き人は仏となって、私たちの合わせる手の中、心の中にいつでもいて下さるからです。

しかし、伝えられてきた仏教習慣には、大切な家族が生かされている今に、仏さま（仏の教え）にふれて、永遠の「いのち」のあることを知ってほしいという先人の願いが込められています。仏縁を大切にお勤め下さい。

お知らせ

8月は「かなであん便り」「奏庵法座」はお休みです。法事や葬儀などの仏事は通常通りお参りさせていただきます。いつでもご連絡下さい。

日本人には最初からデザイン自体に違和感のあった新国立競技場、建築予算が2千億6千万円と換算され最終的には3千億にまで膨らむだろうところ、やっと見直されることになった。■白紙に戻してゼロからのやり直しを決断したのは安倍総理だったが、「よかった、あんたは偉い」と思っていないのが国民多数の本音だろう。その理由を「国民とアスリートの意向を汲んで」という首相発言は、一見国民目線のように他人事の感は否めない。集团的自衛権が施行しやすくなる安全保障関連法案可決を紛らわそうとしたのだろうが、「出来ることなら推し進めたかった」とくらい言った方が国の長らしい。■国会で「反対してますよ」という姿勢を見せたいだけの野党女性議員のカメラ視線はポーズだけを露見し、「アスリートの負の遺産になる」と異常な感情の昂りで訴えた元女性マラソンランナーも「変」だった。もっと説得力と真実味のある「No」が示せないのか。反対側の意識の浅さを目にしているうちに、「そのくらいの金捻出できなかったのかねえ」とたまらず本音を漏らした元首相の立場の方が解りやすいと思えてくる。さすがに拡散されるインターネットの「Yes」か「No」も判断のつかない反応だ。■それで思い出したのが、カナダ駐在時代にあったモントリオール冬季オリンピックだ。メインスタジアムは屋根をワイヤーで引っ張るという可動式の計画だったが、何年か後に訪れた時もまだ出来上がってはいなかった。カナダ国民は「フレンチだからなあ（モントリオールのあるケベック州はフランス語圏）」で済ませた。■新しい競技場はレガシー（遺産）になるものということだが、それなら取り壊された伝統的な競技場や聖火台も、敗戦後を懸命に生きて来た日本人の目に数々のシーンを焼き付けてくれた遺産だったが、それは建物だけが作ったのではない。日本国民として願うのは、国威を強調するものでなくてもいい、オリンピックに間に合って、数々のドラマで彩られるものになることだ。Norimaru